ホトトギス

十二月号

ホトトギス
昭和二年四月三日第三種郵便物認可
平成二十三年十二月一日発行（第百十四巻第九号）

俳句随想〔三百五十四〕

汀　子

俳句は短い詩である。言いたい事があっても何程のことも言えない。十七文字の中に詰め込めば詰め込むほど散漫になり余韻のない乾いた感想に終ってしまう。であるから、省略ということがとても大事になってくる。長年俳句に親しみ、俳句を詠み、俳句を選んでくると、一句の余韻から伝わって来るものが作者と読者の心が通い合う絆の役目を果たすようになる。大した事を言ってないのに何故様々な想像が一句から沸き上がって来るのであろうか。それが短詩形の素晴らしさであり難しさなのである。虚子の名句に「白牡丹といふといへども紅ほのか」がある。名句があるとそれを越えた牡丹の句は中々出来ない。

今年の日本伝統俳句協会全国俳句大会の募集句六千余句の中から大会大賞に選ばれた秀句は牡丹の句であった。「牡丹の風とも風の牡丹とも　辻美彌子」。虚子の句は色が主体となっているが、牡丹の動き香りも伝わってくる。大賞の句も余韻として牡丹の華やぎと甘い香りを風が見事に伝えている。それらは全て単純な描写によって語られ、その部分から余韻として伝えるという俳句の極意が余すところなく発揮された。

この句は選者の三人が特選に選び、二人が入選に選んでいる。

PDF= 俳誌の salon

句日記

汀子

平成二十二年十二月四日　芦屋ホトトギス会

太陽を大地に招く冬木かな
短日の風荒るる日の空の旅
焼諸を急いで食べること勿れ
恒例の焚火の準備して旅に

十二月五日　下萌句会

後ろから前から咳の旅路かな
見るための落葉を掃かずあることも
落葉にも見頃といふがありし庭

十二月六日　ロイヤル俳壇

顔見世の話題集めてゐる役者
掃き寄せるもの啄んで冬の鳥
初雪の消息山を降りて来し
又一人偲ぶことより年惜む
咳き込んで次の言葉を失へり

十二月七日　有恒倶楽部

翳る赤日当る紅も苑の冬
笹鳴きてゐると気づきしよりのこと
露寒の風音連れて巡る苑
あるやうで無き短日の太陽よ
金星に何かはじまる冬の朝
冬紅葉誘ふ水面のありしこと

十二月七日　無名会

一片をこぼしてゆきし時雨雲
短日の予定加はり来しままに
冬霞浪速は川の多き街
短日の次の会へと急ぎけり
六甲の山遠ざかる冬霞

十二月七日　忘年句会

暮れて着く会落着きぬ日短か
やうやくに銀杏落葉の道に出し

十二月九日　清交社

句碑除幕ありし一劃年の暮
句碑除幕てふ華やぎも年の暮
花束を抱けば寒さのなかりけり
華やぎをさそふしぐれとなつて止む
散るものを散らし孤高となる冬木
鴨の陣沈む夕日に染まりゆく
さつきまで時雨をりしが祝ぎの晴
由緒ある宮に句碑建つ年の暮

十二月十日　工業倶楽部

人恋しかりしや笹子近かりし
話題又戻りし時代漱石忌
その頃の話題集めし漱石忌
冬ざれを風情としたる手入かな

十二月十四日　大阪倶楽部

短日や事故渋滞といふ表示
どうしても寄らねばならぬ日短
遅るるもみな短日のせゐにして
雑炊に火を入れてもう一と仕事
彩りを地に移したる冬木立
六甲の稜線模糊と冬霞

十二月十四日　綿業倶楽部

冷たしと云ひ痛してふ指の先
初雪や街より見えぬ消息も
これよりの時間刻々年惜む

十二月十五日　夏潮句会

吉野よりもたらされたる葛湯とて
庭に出てすぐ引返す寒さかな
煖房の部屋にとどまる人ばかり
太陽の傾きそめし櫨紅葉
俯瞰して居りし二階に寒さなく
冬の星弾む話題もよべのこと

十二月十七日　俳句王国吟行

息白く弾む声より初対面

十二月二十四日　時雨句会

彩りを大地に移し冬木立
朝の間の時間やりくりクリスマス
気づきたるとき隙間風なりしかな
庭といふ居間のつづきの冬木立
ひと仕事もうひと仕事隙間風

PDF= 俳誌の salon

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年十二月二日　蕉心会

黄落やえうちゑん児のおままごと
花八手景に溶け込むてふ主張
やつとこさ色を尽して冬紅葉
冬帝は待機上空千メートル
竹箒四十五度に落葉掻
落葉掃かないで俳句を作るから
山茶花の目立ちたがつてゐる白さ
山茶花やちよつと白過ぎるんとちやふ

十二月四日　虚子記念文学館遇会

蕪村忌や京の雨とははんなりと
碧梧桐虚子居て蕪村忌の狭庭
蕪村忌や錦市場に人溢れ
蕪村忌や与謝に句碑建つ話など

十二月五日　野分会芦屋例会

何となく猫も数へ日知るやうな
雪吊に万有引力一寸邪魔

十二月六日　はせを句会

古書店の隅に果てたる青写真
梟の二十五時てふ目覚かな
電波塔少し伸びたる神迎

十二月七日　カトリック新聞選者吟

スータンの手に映ゆポインセチアかな

十二月九日　土筆会

初氷子等の遊び場減りにけり
日輪に仕上げられたる冬田かな

十二月十日　六甲会

太陽の黒点目差す冬木の芽
電球にがんじがらめの冬木の芽
ビル風に冬芽研がれてゆきにけり
未来ある君に焚火の秀の高く
消防車二台侍らせ川焚火
白銀の精触れてゆく冬木の芽
焚火焚く人類ここに誕生す
汀子邸とは冬芽にも詩心

十二月十日　虚子記念文学館投句

写生文出す話など日向ぼこ

十二月十二日　「さわらび」七五〇号記念句会

冬うらら禁酒解く日を夢に見て
神苑の落葉掻く音にも祝意
三代の躍動確と冬ぬくし

十二月十三日　朝日カルチャー若草句会

寒禽の声にビル街縮みゆく
黄落を雨輝かせゐる街路
冬帝の使者本降りとなりにけり
有明の未来語る目冬ぬくし
五時間の車窓富士嵌め時雨嵌め

十二月十六日　登高会

騙されてみたい狐と君の嘘
虚子の句をもて古暦をさめけり
古暦まだ中心にある厨
寄鍋の蓋が躍れば箸騒ぐ

十二月二十日　「田鶴」近詠出句

頬被昔も今も帰り道
冬田今土黒々と生きかへる
初氷風に解けてゆきにけり
頬被しばれるといふ言の葉に
冬桜精一杯の白さかな

十二月二十一日　草木瓜会

白きもの妖精めきて冬の雨
寄鍋の海老赤々と煮え過ぎて
寄鍋に視線迷うてをりにけり
天帝の涙とも見ゆ冬の雨

十二月二十二日　目黒学園句会

東京都目黒区色の枯木立
子規の世の蕪村忌セピア色の夢
蕪村忌の写真明治のホトトギス
枯木立風に奏でるフーガかな

十二月二十三日　野分会東京例会

雪吊の縄百本にある霊気

十二月二十四日　若水句会

日向ぼこめく陸橋の高さかな
冬うららオリンピックのありし街
数へ日や仕事十指に余るほど
若者の街行年といふ静寂

十二月二十七日　カトリック新聞選者吟

寒灯を足して祝はる聖家族

PDF= 俳誌の salon

雑詠

廣太郎　選

香水といふ雑音やコンサート　神戸　長山あや
花びらのごとひとひらのあらひかな　同
一匙のＶＳＯＰ暑気払ひ　同
日本人四人の街の花見かな　瑞安　小川龍雄
住み古りて来たる異国に朧月　同
春愁や一時帰国は取り止めに　同
じやんけんの拳日焼をしてをりぬ　芦屋　黒川悦子
叡山へ続く浦道湖晩夏　同
経堂に立ち込む黴の香に拝す　同
淡海以て近江涼しくしてをりぬ　奈良　古賀しぐれ
百の窓百の大琵琶避暑ホテル　同
ヨットレースてふ大琵琶の格闘技　同
父の日や銅像の父朝日浴び　東京　大久保白村
父の日や煙草も酒もやめられず　同
父の日も家では煙草吸へぬ父　同
雲の峰海一枚を鏡とし　神戸　山田佳乃
青田風湖国豊かな水引いて　同
月鉾の雲曳きてくる高さかな　同

大阪を離るる友と鱧尽くし　同　日下徳一
こいさんの船場言葉や鱧の店　同
鱧食うて宵の新地で別れけり　同
暮れてより波音高し夏の月　龍ケ崎　今橋眞理子
南国の夜をマンゴーしたたらせ　同
銀漢を我も一粒となり仰ぐ　同
蜘蛛の巣に我はモスラとなりて立つ　静岡　須藤常央
神に酒仏にメロン供へけり　同
君知るや燃ゆるハイビスカスの夜　同
炎帝の機嫌もつとも良き日かな　東京　橋本くに彦
ひとところミュートの効いた蟬時雨　同
ハース版ノヴァーク版の蟬時雨　同
政治家の笑まふポスター五月雨　徳島　岩田公次
蠅叩昭和の暮しありにけり　同
東京の坂見上げゐる暑さかな　同
そよりともせぬ夏草でありにけり　熊本　岩岡中正
幹の中から涼風が吹いてくる　同
いつ来ても同じ掛軸鰻宿　同
虚子偲びつどふ面々露涼し　京都　安原　葉
星空にナイター明り浮くところ　同
海の日に縁なき老の畑仕事　同
余りにも北海道の涼しさに　東京　河野美奇
空港は早や秋近き草のいろ　同
睡蓮に沼ふところの静寂かな　同

PDF= 俳誌の salon

雑詠句評（十一月号より）

美　奇・とほ歩・むつみ
千鶴子・葉　　・憲　明
静　龍・保　佳・中　正
眞理子・廣太郎

茅葺のくらしのちらと夏座敷　福知山　吉田節子

茅葺の家の夏座敷とあれば障子や襖を取り払い、簾戸をはめたり、葭衝立を置くなど、よく風の通るように設えてあるだろう。そして、そこに暮らす人の起居などがちらりと垣間見えるのだ。日本の原風景の一つである茅葺の家は現在どんどん無くなっている。岐阜県白川村や福島県下郷町、今年六月、筆者も尋ねた京都府美山町など「重要伝統的建造物群保存地区」として大切にされている。

懐かしい、心安らぐ景の一瞬を捉えられた、やわらかく余韻の深いお句である。（美奇）

恐らく、先頃行われた北近畿ホトトギス俳句大会で吟行した京都の美山町という、茅葺屋根の家が多く残った集落を詠まれた句であろう。日本の原風景とも言える。大自然と調和した生活を垣間見て、一種の懐かしさも感じられたのであろう。何といっても「夏座敷」の風情が感じられる。（廣太郎）

筍や大きく貰ひ小さく煮る　龍ケ崎　今橋眞理子

筍。初夏、五月の季題。先端が土から出るか出ないかの内に、掘り当てる様な小さいものでも、その大きさは掌に余るであろう。

さて掲句。貰った筍を目の前にして、どう料理しようか……。

食べやすい大きさに切られ、煮られて皿に盛ってみると、あんなに大きかったものが、こんなに……と言う感慨が見てとれる。

小さく煮られてはいるが、料理される前の筍、皮に包まれた一本の筍の大きさが目に浮かんでくる句である。（とほ歩）

貰いものの「筍」は、結構大きな物が多いが、いざ調理をする段階になると、皮を剥けども剥けどもなかなか食べられる箇所が出て来ずに、結局小さくなってしまう、という物も珍しくない。又、そうでなくても、調理する時には、適当な大きさに切りもする。大小の対比が面白い。（廣太郎）（以下略）

PDF= 俳誌の salon

天地有情

沢子選

目の遣り場なき震災の街薄暑　仙台　小島左京
涙腺の緩みし海の夕焼けて　同　同
豪雪の里にもめぐり来し五月　京都　安原　葉
山背吹くここらは越の米どころ　同　同
藻の花を咲かせ茅葺屋根の里　東京　稲畑廣太郎
はんなりとこいさん薫風と来はる　同　同
槍恋ひし穂高恋ひしと登山地図　神戸　後藤比奈夫
登山地図お花畠を鏤めて　同　同
踏み入れば露の涼しさ毀れさう　いわき　志賀青柿
形代の流れに瀬音なかりけり　同　同
万緑や底をひとすぢ利根運河　千葉　大木さつき
図書館の高窓明り森涼し　同　同
原爆忌その閃光をしかと見し　東京　今井千鶴子
ここからが家まで上り白木槿　同　同
中空に紅失したる夏の月　櫃原　稲岡　長
梅雨の月己が所在の雲明り　同　同
咲き満てる欝金桜の陰日向　徳島　上﨑暮潮
風過ぎしあと牡丹の匂ひくる　同　同

朝虹のサンテグジュペリてふ空港　東京　田治　紫
ノアの見し虹はかくやとばかり粲　同　同
大方は故人の句集曝しけり　福山　竹下陶子
この面の小春心をあけくれに　同　同
貧しさのゆゑの信心麦熟るる　熊本　岩岡中正
人生のごとくに破れし芭蕉かな　同　同
滴りとなりゆく一部始終かな　箕面　井上浩一郎
咲き継いでまた散り継いで仏桑花　同　同
蝦夷までの雲海の下地震の地も　東京　河野美奇
夕虹の消えしばらくは沼明り　同　同
秋草といふほかはなきか細さよ　神戸　三村純也
あかときの一ト降りに秋忍び寄る　同　同
一つ灯に二人の読書夜の秋　同　長山あや
またひとつ灯の消え軽井沢初秋　同　同
日本に言の葉ありて涼しけれ　大阪　佐土井智津子
合歓咲けば思ひ遥かでありにけり　同　同
寄り添へる巴の塚も夏木蔭　吹田　宮﨑　正
辷るかに湖渡り来る風涼し　同　同

PDF= 俳誌の salon

天地有情句評

汀子

涙腺の緩みし海の夕焼けて　仙台　小島左京

苛酷な自然災害の後の夕焼の美しさ。一層悲しい。

豪雪の里にもめぐり来し五月　京都　安原　葉

ようやく初夏の快晴に慰められる雪国。

藻の花を咲かせ茅葺屋根の里　東京　稲畑廣太郎

昔の暮しを大切にしている里を訪ねて。

槍恋ひし穂高恋ひしと登山地図　神戸　後藤比奈夫

若いころ親しんだ登山を地図に追う郷愁の思い。

形代の流れに瀬音なかりけり　いわき　志賀青柿

流れてゆく形代に心を置いている作者。

万緑や底をひとすぢ利根運河　千葉　大木さつき

利根川に注ぐ運河の道筋を知って。

ここからが家まで上り白木槿　東京　今井千鶴子

高台にあるわが家。

梅雨の月己が所在の雲明り　橿原　稲岡　長

雲間に見届けた梅雨の月の所在。（以下略）

PDF= 俳誌の salon